

木は

野口武久
(詩人)

木は

樹にならなければ

よかったと思っっている

木になんか

生まれてこなければ

よかったと思っっている

鳥や風に運ばれ

あこがれの空をめざして

生きてきたのに

気がつく

もはや行き場がない

いつか

この土地の風景に同化していたのだった

よりかかるものがないから

まっすぐそそり立つだけだ

高く 高く

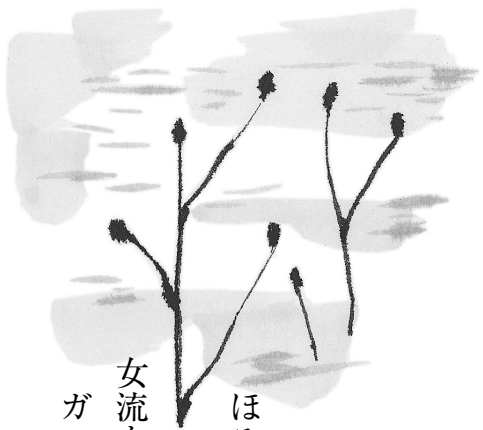
遠い日の

あこがれの空をめざして

酒林

SAKABAYASHI

随筆特集



女流を超えた女流詩人新川和江のこと
 ガマの油から糖尿病の新薬なるか？

ほろ酔い詩歌紀行 — 酒場の聖母

歌人・白川静のこと

花苗の記

曖昧な記憶

東大を優勝させよう会

蕎麦屋の勘違い

絵と文 Ⅷ コケモモ

詩 Ⅷ 木は

野口武久…1	池井優…4	高橋和島…6	中西美子…8	安森敏隆…10	日高昭二…12	内野潤子…14	宮地智子…16	杉本忠夫…18	志村有弘…20
--------	-------	--------	--------	---------	---------	---------	---------	---------	---------

絵と文 昭和(大正十五年)生まれ 堂 昌一…22

絵と文 記憶の中の三助 伊勢田 邦貴…23

「異様の者」 志村 栄守…24

肝っ玉母さんが来た 桐原 良光…26

絵と文 まねき花 佐川 毅彦…28

眞夏のシャーロック・ホームズ 片岡 義男…30

鉛筆を削って叱られた 片岡 義男…32

絵と文 ハイドンゆかりの地、アイゼンシュタット さかもと ふさ…34

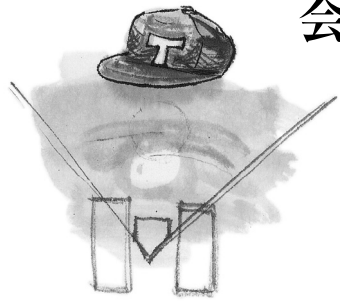
里山の四季 新田 啓造…36

小説・江戸神仏歳時記(17) —東京上野不忍池弁天社 郡 順史…38

表紙・グラビア…欄間彫刻



東大を優勝させよう会



池井 優

(慶應義塾大学名誉教授)

東大―明治二十年日本のリーダーを養成すべく東京帝国大学として発足してから、この大学はあらゆる分野に人材を送り込んできた。官界、政界、財界、学界、言論界はいうにおよばず、最近では東大出の落語家が誕生するなど芸能界にまで進出するに至っている。だが、その東大がどうしても出来ないのが、東京六大学野球リーグ戦における優勝である。

東大が東京六大学野球リーグに加盟を申し込んだのは一九二五年のことであつた。当時東大には東、清水という優秀なバッテリーがいたが、彼らが卒

業してしまつたら、チームはガタガタになり野球部は解散になりかねないと早、慶、明などはその永続性を危ぶみ、「どんなことがあつても続けますね」と代表者に念を押してようやく許可した経緯があつた。以後、東大野球部は入学難、大学紛争による入試の中止といった困難のなか、今日まで東京六大学の一員としてがんばっている。その東大が優勝に一番近づいたのは、戦後六大学野球が復活した一九四六年のことであつた。戦後まもないとあつてこのシーズンだけは一回総当りの変則で行なわれた。エース山崎論が力投、早

稲田、明治、立教、法政を連破、四連勝でおなじく四勝の慶應を相対した。山崎は好投、慶應を一点に抑えたが、打線が慶應のエース大島信雄の前に完封され二位に甘んじた。その後東大には苦難の道が待っていた。一九六九年には大学紛争で入学試験が中止となり、一学年そっくりメンバーがいない状態さえ経験、特別措置で留年生の出場を認めるといった苦肉の策で苦境を乗り切つたこともあつた。

だが、その東大野球部に「異変」が起こつた。一九七三年春明治に二勝して七季ぶりの勝ち点をあげ、さらに法

政にも一勝して連敗を三六で止めたのだ。秋は慶應に連勝、法政、立教からも一勝ずつをあげ、確実に力をつけたことを証明したのであった。東大野球部の長い雌伏の時代を見続けてきたファンの目には新生東大の誕生と映った。立教に勝って四勝目を挙げたその日熱狂的なファンと思われる互いに名も知らぬ三人が神宮球場近くの店で祝杯を挙げた。そのなかの一人が言った。「この分なら東大は優勝できますよ。優勝を応援する会を作りませんか。会発足の基本方針、趣意書、規約、会費、会報など十一人でスタートする予定であったが、「夕刊フジ」が冷やかしをこめた記事にしたため、思わぬ申込者も増えた。

設立総会は一九七四年二月、会の名は「東大を優勝させよう会」に決まった。「優勝させる」ではおこがましい、「優勝を祈る」ではあまりにも他力本願、そこで意気込みと幾分のユーモアをこめて「優勝させよう会」としたのだ。会報の名前は東大のスクールカラーのライトブルーから「淡青ふあん」とした。会が発足して最初のリーグ戦、東大の相手は前のシーズンの覇者明治であった。なんと東大は5―4で明治を下し、会員を熱狂させた。翌日の朝日新聞は社会面に八段抜きで、「東大を優勝させよう会 神宮球場で初の氣勢」と報じた。この快勝と各紙の報道で会員はぐっと増え、五月中旬には一三六名になり、しかも年齢、職業を問わず、地域も全国に広がった。春のシーズンは最下位に終わったものの東大の選手としては二十一年ぶりとなる首位打者を遠藤選手が獲得、秋にはあの「怪物」といわれた法政の江川に初黒星をつけ、また大学での初ホームランを浴びせるなど応援する会員を喜ばせる活躍をみせた。

赤門旋風が吹き荒れたのは一九八一年春のことであった。部はじまって以来はじめて早慶両校から勝ち点を奪い、「東大V1猛爆」、「東大初Vへ前進」などの活字が新聞に踊り、東大史上初のシーズン六勝目をあげた立教戦はNHKが「国民的関心事」として全国に放映したほどだった。普段ガラガラ

蕎麦屋の勘違い

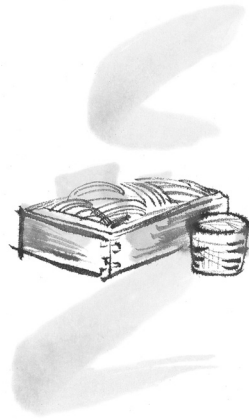
車で五分ほどのところに蕎麦屋ができた。

町の旧家の俵がどこぞで手打ち蕎麦の修行をしてきて開いた店らしいという話を聞いた。

蕎麦には目のないほうだから、家人を誘って出掛けてみた。

最近の流行^{はやり}なのかどうか、店は新築なのに窓のない土蔵のような造りになっており、中は薄暗い。

おそらく落ち着いた雰囲気のお店にしようという狙いなのだろうが、息苦しく陰気臭い感じになってしまっている。



家人と二人、ざる蕎麦とかけ蕎麦を注文し、半分ずつ分け合って食べることにした。

卓上の献立表を見ると、かけ千円、ざる千円となっている。田舎町にしては高いが、味次第かなと思つて、運ばれてくるのを待った。

入っている客の数の割には長く待たされて注文した品にありついたが、失望した。かけもざるも特に不味くはなかったものの、ごくありふれた味だった。つまり、五百円前後で食べさせる普通の店の味と大差なかったのである。

高橋和島

(作家・郷土史家)

わたしは再度、この店に来ることはないだろうと思つた。

近頃は、味は変わりばえしないのに値段だけ高い蕎麦屋が増えているような気がする。

わが町だけでもかけ蕎麦千円の店が右の店を含め数軒ある。いずれも手打ちを売り物にする店だが、味のほうは大したことはない。断言するが、千円出してまで食べるほどの味ではない。

勝手な推測をすると、こういう店の店主は、多少店構えにカネをかけ、手づくりだ、鰹出汁だともったいをつけ

れば、値段は高くとも客は来てくれる、と勘違いしているのではあるまいか。

スーパード売っている一人前二百円ほどの蕎麦を時々、家人が茹でて食わせてくれるが、わたしには町の蕎麦屋の味と決定的な差があるとは思えない。これとさほど変わらぬものを千円で商おうというのだから、厚かましい限りと言わざるをえない。

確かに喰りたくなくなるような旨い蕎麦を食べさせるところはある。これぞ手打ち、これぞプロの味と褒めたくなる店だ。こうした店なら、幾らか値段が高くても客は納得するだろうが、それでも庶民の食べ物である蕎麦に飛び抜けて高い値段を付けるのは、土地代やテナント代の高い大都市の一等地だけにしてもらいたいものだ。

思うに、食べ物を通う人たちは、どうせ味の違ひなんか判りはしないと、客を舐めている節がある。船場吉兆、赤福餅、ミートホープ、飛騨牛や一色うなぎの間屋等々、枚挙にいとまのない、いずれの偽装事件も、みなこれか

ら来ていると思う。

騙すほうが悪いに決まっているが、客のほうにも幾らか責任がないでもない。

名が通つていけば、あるいは値段が高ければ旨いと信じ込んでいる人たちが、料亭や蕎麦屋などで、通ぶつて舌鼓を打つ。

こうした人たちが沢山いる以上、馬鹿正直に良心的な値段をつけるより、高値を付けるほうが商いになる……と考える業者が出てくるのは当たり前だ。彼らにすれば、マーケティング上の価格差別化をやるうとしていただけのことだ。

山に囲まれた田舎町に住んでいる者として言わせてもらうが、山菜はたいして旨いものではない。例えば珍重されるタラの芽の天ぷらより、ありふれたタマネギの天ぷらのほうがよほどおいしい。食材として世界中で食べられているもののほうが旨いのは当たり前なのである。同様に熊肉、猪肉、鹿肉のいずれも決して美味とは思わない。

上等な牛肉、豚肉、鶏肉と比べたら間違いなく味は落ちると断言しておく。

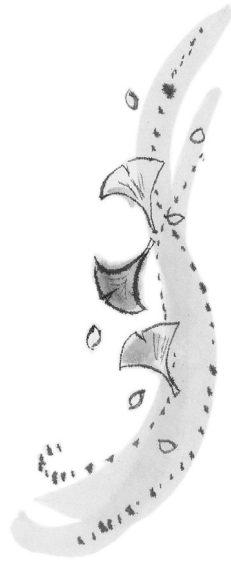
こうしたものは、高級料理を食べ飽きた人たちにとっては珍味であり新鮮な味なのだろうが、それとて大仰に褒めねばならぬほどの味ではないわけだ。

ところが、わけ知り顔をしたがる人たちが美味だ美味だと囁し立てるので、山菜や右の獣肉を呆れるような値段で商う料理店や旅館が大手を振っている。

本来なら、「山の中ゆえ、このようなものしか出せませんが、お許しくだされ」とへりくだりながら出すべき料理、粗末な山里の料理、田舎料理を、さも高級料理のように食べさせるわけだ。

数日前、素うどんやぶつかけうどんを三百二十円で食べさせる讃岐うどんの店が家の近くにオープンした。開店の日に足を運んで食べてみたが、味は悪くなかった。鼻屎にするつもりだ。美食を知らぬ庶民のわたしにとって、こういう食べ物が一番なのである。

コケモモ



中西美子

関内の駅近く仕事帰り足元にたくさ
んの実が落ちて潰れていました。頭上
を見上げると大きな木に小さな実がた
くさんついています。もしかしてこれ
は、コケモモかしらとよく見ようと立
ち止まりましたが会社帰りの人並みに
いささか邪魔なので確かめるまで出来
ずに帰りました。街路樹に実のなる木
が植えてあると楽しみはあるのですが
その反面実の落ちる時期は路が汚れて

少々不快に感じるのは、私だけでしょ
うか。銀杏並木の紅葉は素敵な演出だ
けれど銀杏の実でも踏んでしまうと臭
くてたまったもんじやないと思ってい
ます。我が家の花ももも、花は、おお
いに楽しませてくれますが実が落ちる
ともう掃除が大変です。ちよつとサボ
ると、子バエが沸いたりもします。と
は言うものの、相模女子大の銀杏拾い
は、有名で市民の楽しみのひとつになっ

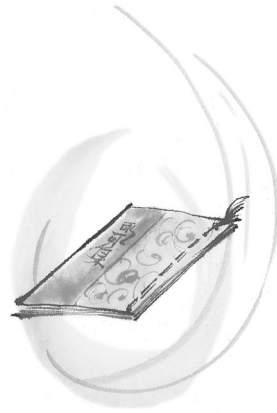
ているようです。そんなことをあれこ
れ思っていたところ友人がコケモモの
枝を画材にと持ってきてくれました。
まん丸の赤い実は、濃いグリーン
の葉に良く映えてとてもかわいいもの
でした。来年は、あの大きな街路樹が実
でいっぱいになってる所を明るいと
きに見ようと思います。



歌人・白川静のこと

東雑記Ⅲ)

ひたすらに花を好みし君ゆゑに満堂の花もて君を飾れり(桂東雑記Ⅲ)



安森敏隆

(同志社女子大学教授・歌人)

長年共に生きてきた妻の臨終に付き
添いながら「思わず口ずさむよう」に
「うた」があふれるように出て来たの
である。まさに挽歌であるが、相聞歌
にも通底する妻への「いのち」を慈し
む歌にもなっている。まことに、絶唱
の「いのち」をうたった七十首の歌が、
おのずから最晩年になって沸騰してき
たのである。

歌人・白川静が蘇ったのである。そ
の白川静が若くして歌を好み、歌人の
一人であったことはあまり知られてい
ない。

白川静は、小泉琴三こいずみ ことぞうのもとで学生時
代に短歌をはじめ、「ポトナム」や「く
さふち」に短歌を発表し、中国学の独
自の分野を確立し、晩年は再び「ポト
ナム」の名譽顧問として歌も作った。
「うた」とは「拍つ」ごとく神に「訴
える」ものであるというのが白川静の

平成十三(二〇〇一)年四月より、
白川静は、「ポトナム名譽顧問」になっ
て「ポトナム」に復帰する。また、平
成十五年、九十三歳になった白川静は
「ポトナム全国大会・京都」で「短歌
の原質」と題して、一時間の約束の講
演を二時間近くも立ったまま、黒板を
使って熱弁を振るう。

短歌のリアリズムは、単に見たり聞
いたりするリアリズムではなく、魂が

乗り移るリアリズムでもある。短歌は、
「いのち」の根源をうたうものである。
その「いのち」の根源の歌が妻の病氣
と〈死〉によって醸成され、平成十七
年の「卯月抄」(桂東雑記Ⅲ)平凡社)
の妻に捧げる歌となって結晶したので
ある。

我が眼守まもる計器の針の揺れ乱れやが
てま白き畫面となりぬ 四月六日(桂

考え方である。

明治四十三年（一九一〇）年四月、福井市の佐佳枝中町の洋服屋の次男として生まれる。

母方には読書の人が多く、幼児の頃から論語や和歌を聞く機会が多くあり、「兄が友人から借りてくる雑誌や立川文庫などを拾い読んでいた。」「私の履歴書」幕末の歌人で万葉集の橘曙覧が出たのもこの地であり、橋本左内の邸も近くにあり、日本の古い時代に先ず興味を持つ少年であった。順化尋常小学校を終え、姉を頼って大阪に出て、大正十三（一九二四）年春、広瀬徳蔵の事務所に住み込み、成器商業夜間部に通う。この時、広瀬徳三の蔵書の閲覧が出来「国訳漢文大成」に親しみ、楚辞や唐詩を読み始め、殊に「万葉集」に親しむ。その「万葉集」の発想を元に東洋的なものの根源に興味を持ち、「万葉集」と「詩経」との比較を夢見ようになつていったのである。

白川静の学問と短歌の師である小泉芝三が立命館大学の前身である専門学

部文学科国漢学科に赴任して来たのは昭和七（一九三二）年であった。そして同年の末には「ポトナム京都支部」が生まれた。昭和八（一九三三）年四月、白川静は二十三歳の時、立命館大学専門部文学科国漢学科に入学する。そして昭和一〇年には「ポトナム」に所属し短歌を発表することになる。更に昭和十一年には「立命館大学短歌会」が発足し、其処にも顔を出すようになる。

師である小泉芝三（藤造）は、大正十一（一九二二）年一月、京城公立高等女学校の教諭となつて京城に赴任する。四月発行所を、「朝鮮」京城の百瀬千寿方において四十数名で短歌誌「ポトナム」を発行する。大正十三（一九二四）年には発行所を東京に移す。すでに昭和八年一月号に「現実的新抒情主義心抒情主義」を発表し、ポトナム結社の時代に対応する指針とする。その直後に、白川静は小泉芝三のもとに入門するのである。昭和十九（一九四四）年三月号の「ポトナム」の第二十

三巻三号（通巻二五四号）をもって休刊し、四月より雑誌統合の政策により「アララギ」に合併されることになるのである。

白川静にとつて「万葉集」の研究、殊にその「初期万葉」の研究は「詩経」の研究の前から構想されていたものである。小泉芝三に出会う昭和九年以前において、小泉芝三の大家家持論に共感し、アララギ派の素朴実在論による自然の捉え方とは違つて「初期万葉」論を構想していたのである。「万葉」についての考説を試みることは、私の素顔の一つである（「あとがき」と語り、「詩経」や中国文学を主にやつてきたが「素顔を忘れていたわけ」ではないことをくりかえし述べている。続いて、十五年たった平成六年「後期万葉」も一挙に書かれて（白川万葉論）は、一応の完成を見る。

その間に、白川静の字書三部作『字統』（昭和五十九年）『字訓』（昭和六十二年）『字通』（平成八年）が構想され、先ずは書かれたのである。

ほろ酔い詩歌紀行

酒場の聖母



日高昭二

(神奈川県大学教授)

日常生活のある瞬間に、異様なもの、歪んだもの、変則的なものの存在を感じることもある。普段はつきりと思いつかべることは少ないが、突然風景が変わったり、光の中から不意に影の中へ踏み込んだときなどに、そういういった感覚に襲われることがある。

萩原朔太郎という詩人は、そうした錯覚に満ちた感覚や、身体的な疾患の隠喩に富んだボエジーの持ち主であった。それがまた、いわば探偵趣味にも通じるイメージの氾濫をともなつて表されてもいる。

たとえば、道端に転がっていた得体

の知れない者を「酒精中毒者」に見立てるなどの詩がそうである。ただそれを見ているならまだしも、彼の心臓やはらわたまで取り出してみるといった嗜虐的な光景が示されたりもする。それが読む者の深層心理を唆していくというわけなのである。

さらに、詩集『蝶を夢む』（大正十二年）に収められた「夜の酒場」という一篇など、不思議というか、奇妙というか。

夜の酒場の

暗緑の壁に

穴がある。

かなしい聖母の額
額の裏に

穴がある。

酒場の壁に聖母マリアの額が掛かっているという光景自体すでに異様であるが、その額の裏に「穴」があるという。そしてその「穴」から覗くと「異様な世界」が広がるとされているが、しかしそれは「だれも知らない」と記されたあとで、さらに詩人は次のように。

よしんば

酔っぱらつても

青白い妖怪の酒盃は、

「未知」を語らない。

おそらく、「酒盃」という「妖怪」は、日常の延長であつて、この世には「未知」なるものがさらにひそんでいる、とでもいうのであろうか。

朔太郎にとつて、目に見えぬもの、語ったことのない世界を、まざまざと知らせてくれるものがあつた。それは映画であつた。「映画」は、「酒盃」という日常の魔術と同じく、いやそれ以

上に、さまざまなイメージをかきたてるものでもあった。たとえば「月夜」という短い三行の詩。

へんてこの月夜の晩に

ゆがんだ建築の夢と

酔つばらひの円筒帽子と。

この「円筒帽子」には「しるくはつと」というルビがふつてあるが、それがなかなか落ちずに酔つばらいの頭の上にある。彼がふらつくとともに、周囲の建物もまた歪んでみえる。そうして頭上の月までがへんてこな形をしているという、まるでスクリーンに映った映画のひとつまのようだ。

朔太郎が東京に移住した大正末年頃は、彼がこれまでの日常で目にしていなかったものであふれていたことも事実であろう。林立するアパート群、密集する工場、カフェやパノラマ館など。

そういう光景を目にして彼は、群衆の一人としての孤独をかみしめていたといつてよからう。

それを逆にすれば、生まれ故郷である群馬の風景が、あたらしく望郷の対

象にもなる。とくに、昭和四年の夏に夫人と別れ、二児を連れて生家へ戻り、さらに単身上京してからの詩には、望郷のなかに憐憫と孤独がいつそう増してくる。たとえば、その年の十一月、東京赤坂のアパート「乃木坂倶楽部」

に過ごした折の詩篇には、「人生の虚妄」を歌う詩句が書きつけられている。そこで詩人は、「わが思惟するものは何ぞや」とみずからに問いつつ、「いかなれば追はるる如く／歳暮の忙がしき街を憂ひ迷ひて／昼もなほ酒場の椅子に酔はむとするぞ」という激しい言葉で結ばれている。

しかし、そういう自問も、やがて静かゆつたりした時間のなかで、やさしい慰撫のこぼに代わるときがくる。晩年の散文詩「虚無の歌」という一篇

には、こう歌われている。

エビス橋の側に近く、此所の侘し

いピアホールに来て、私は何を待

つてゐるのだらう？ 恋人でもなく、

熱情でもなく、希望でもなく、幸

運でもない。私はかつて年が若く、

一切のものを欲情した。そして今既に老いて疲れ、一切のものを喪失した。私は孤独の椅子を探して、都会の街々を放浪して来た。そして最後に、自分の求めてるものを知つた。一杯の冷たい麦酒と、雲を見てゐる自由の時間！ 昔の日から今日の日まで、私の求めたものはそれだけだった。

エビス橋のピアホールは、東京の山手線・恵比寿駅の近くの工場街にあり、狭い店内は職工や労働者でにぎわっていたという。その近くに住んでいた朔太郎は、彼らがまだ顔を見せない昼の時間帯によく通つては、ぼんやり物を考えていたという。この詩句を冒頭にあげた「夜の酒場」と比べてみると、あの異様な神経のふるえは一体どこに行ったかと思えるだろう。

それにしても、求めていたのは「一杯の冷たい麦酒と、雲を見てゐる自由の時間」であるとは、また何と含蓄のある、かつ直截なものであろうか。

花苗の記



内野潤子

(歌人・エッセイスト)

近頃、祖母と孫を扱った本や映画が評判になった。「がばいばあちゃん」や「西の魔女が死んだ」その他少し前に韓国の映画で、都会育ちの孫の少年が、田舎暮らしの祖母にあずけられて共に暮らすというのもあった。

私の母は六人の子供を持ち、それぞれが結婚して子供ができて、十六人の孫を持っていた。

長女の私が結婚して生まれた女の子が、母にとっては孫一号となったが、

当時の母には小学一年生の末娘がいたのだった。

母は大変子供が好きで、四十歳になって生まれた末の娘が赤ん坊の時、あまり可愛くて頬をかねで、跡になつて困つたりしていたような人だった。

それでも初めての孫の私の長女を、それはそれは可愛がっているいろしてくれた。

ある時私が不用意に畳に置いた味噌汁の鍋の蓋で、娘の目の脇に軽い火傷

を負わせたことがあった。その時の母の怒りようといつたら、普段はあまり怒らない人だったし私は自分のしたことが、そんなに大変なこと思わなかっただけに今も忘れられない勢いがあった。

「女の子の顔に火傷なんかさせてどうするの、大体子供に火傷させる親の資格がない。」

私は只頭を下げている外はなかった。少し大きくなると自分の小学生の娘にかくれるようにして、幼い孫をデパートに連れて行き、大きな人形など買って帰ったりした。

次々に孫が増えて、遠く住む娘は、出産後自宅であずかつたりしたから、母は大好きな赤ん坊を十分抱くことができた。

大きくなって又中学、高校、大学への入学の度に母は十六人分の心配をしたことになる。

孫のことを書いた父のエッセイに、「このごろは孫がふえて八人になったから、子供たちの心配ばかりでなく、

この孫どもの心配までしなければなら
ない。〈おい、自動車にぶつけられない
ように、四つ角を気をつけろ〉〈あそこ
の孫は小児麻痺の予防注射をしたか〉
〈あの孫の親父は風邪がなおったか〉
こんな心配は人数が多くなると毎日の
ことで、際限がない。孫の親どものこ
とは、もうみんなそれぞれ生活を持っ
ているのだから、先のことはあまり考
えてもみないが、元気のいい孫どもの
顔を見ていると、〈こいつたちが大き
くなるころは世の中がどれだけきびし
くなって行くか、みんなそれぞれにさぞ
苦労することだろう〉と、私はかわい
そうな気さえてくることがある。」と
書いてあって、これが祖父や祖母の心
情というものだとつくづく共感を覚え
ている。当時の父は六十一歳頃のこと
で、仕事も最盛期にあった。

母は公平に十六人を見守ってはいた
けれど、よく孫たちの本質を掴んでい
る処があった。
自分がいつかハワイに行つてみたい
という夢を持っていたが、その時に連
れていく二人の孫は、私の次女珠子と
妹の家の次男賢二郎とはつきりきめて
いた。
この二人が、大変活動的で但つ気配
りの行き届きそうな孫だったのだ。遂
に実現には至らなかつたが、今も妹と
「案外よく分かつていたのね」と笑っ
ている。
私も今、男三人女三人の六人の孫を
持つ身となつた。初めの孫は女の子で、
丁度娘が教員をしていて、その上詩な
ど書きはじめたので、私が手元で育て
ることになつた。
当時四十七歳の私は、まだまだ大丈
夫と引き受けたが、孫のエネルギーを
あずかるのはやはり大変なことで、若
い頃と違って、絶えず心配していたよ
うに思う。
只可愛いだけではいけないと思うの
でそれが又変に自分をしばつてしまつ
た。
幼い孫は、私が懸命につくしても、や
はり母親が好きなのである。
その頃私が友人に当てた手紙を再び
見る機会がありそれには「夏休みは少

し古いものでも読みたいと願つており
ますが、身辺に柔らかない赤ん坊が
いると気もそぞろとなり、ましてや吾が血
を分けたとなると理性のかけらも失つ
ていぢくりまわしております。それで
もよくしたもので、そういうわづらわ
しい愛よりは、そつけなく不親切な母
親にばかりなじんでおります」と書か
れていた。友人はこの手紙に対して「こ
の愛のゆくえが気になります」と一言
書き添えて私に送つてくれたのである。
今は結婚して同じ屋根の下に住むこ
の孫に手紙を見せると「愛のゆくえが
気になります」と面白」と笑つていた。
外の五人も、一人一人お宮参りから
見守つて来たが、今はOL一人、大
学生二人、高校生一人、小学生一人と成
長した。孫たちとはよくメールのやり
とりする。
欲深く生き来し吾か六人の孫の花
火の火に照らされて
わづかづつ孫らに小遣ひ渡すとき
花苗に水注ぐ思ひす
今の私の感慨の二首である。

女流を超えた女流詩人新川和江のこと



宮地 智子

(詩人)

夏目漱石は明治三十八年七月十七日付けの若杉三郎宛ての手紙の中で「元來今の新体詩と云う奴は言葉許り飾って何と云っているのか分からないのは閉口します。あんなものより、平々凡々調で趣味のある嫌味のない事を歌ふ方が洒落て居ますよ。」などと、新体詩に対する嫌悪感を露わにしている。その新体詩の流れを汲む現代詩もまた、漱石ならずとも一般には「言葉ば

かり飾って何と云っているのか分からない」など大いに陰口をたたかれてゐるに違いない。あるいはもはや読者に愛想づかしをされ全く相手にされなくなっているのかも知れない。でも私は悲観しない。新川和江という詩人に会ったからだ。勿論、その名前もいくつかの有名な詩も知っていた。けれど私がかつて目にしたどの詩もあまりに調和的、肯定的で、私の目の前を通

り過ぎてゆくばかりであった。ところが二〇〇〇年四月発行の『新川和江全詩集』を繙くと、そこには全く別の新川和江の詩があった。あるものはただ単に私の目が節穴だったために読んでいなかったに過ぎなかったしあるものは私が単に知らなかったに過ぎない。氏五十歳の年に刊行された『夢のうち』と『所収の「夢の中で」は男と女の関係性を女の側からの確にあるいは冷酷に描いていてみごとである。全行引用したい。

〈夢のなかで 道を訊かれ 教えた
そのひとは疎林の小草を踏んで わたしの指さすほうへ歩いて行った だがその道はまちがっていた わたしはそこらをしばらく散策したあとで べつの小径を行つたのだが そこに朝があつたからだ そのひとはわたしの夢のなかを いまだにさまよいつづけているのであるう 疎林のむこうにはどこまでも明けない夜がつづいていて… 小径のはしにこうして蹲しゃがんで露に濡れながら少しのあいだ待つて

みようか ひき返してきて 夢の奥処おくぢに荒々しくわたしを攫って行くかも知れぬ そのひとを もはやどの朝にも抜け道のない 夢の牢に閉じこめて ひそかに末長く苛こんでやろうか わたし自身も踏入ったことのない わたしの闇を歩きつくしてしまった そのひとを

秀れた人間は同一人格のなかに男性的要素と女性的要素を併せ持つとよく云われるが、そうでなくてどうしてこのような冷徹な表現をなし得よう。一般に新川和江の詩には、その母性が強調されるようだが、それは恐らく母なる大地などと形容される時の母なるものスケールの大きさによるのであって、わが子を慈しむばかりの小さな母性のことではない。作品「かぶりのシャツ」にはむしろ母性を超えたある宇宙観によって捉えられた母と子の関係性が簡潔に描かれている。全行引用した。

（いくらいつても シャツといっしょに この子は何かを脱いでしまう パ

ジャマも着ずに また素裸で ねてしまった子 寝相をなおしてやりながら しげしげと見る これがわたしの子？ シャツを掴みあげてみる また寝顔をのぞく これがわたしの子？ いいえ知らない わたしは知らない ここに寝ている子 たおれている木 落ちている星 岸をなくした舟

詩人の以倉紘平氏は全詩集の葉の中で「人間の生死を見つめる仏性にも似た深くやさしいボエジー」と云い「偉大な母性の力と叡智をひめている」と称える。実際に私が初めて新川氏の聲咳に接したのは二〇〇五年、氏が七十六歳を迎えたばかりの桜の盛んな頃であった。新しく創設された三好達治賞の贈呈式が大阪で催された、その帰りの新幹線の中であった。私は瞬時にして新川さんの母性も仏性も理解してしまった。それは全く稀有な天性と云ってもよいおおらかさ、暖かさ、美しさの絢あはいませになつた大きな存在感であった。

氏四十二歳の年に刊行された『つる

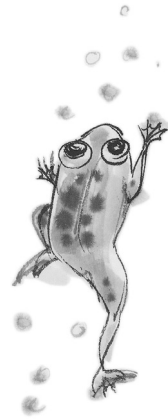
のアケビの日記』所収の「島」という散文詩は冒頭から壮大な生命観が如実に顕われている。

（私はたまたま、ここに在る私を住処すまかとしたにすぎなかった。私はいずれ星を生きるであろう。土蜘蛛、木の枝のオレンジ、雉鳩、もしくは海馬を生きるであろう。当初の企画通りに。…）

と始まり、次に、自身の肉体を一時期、自身の靈魂を寄留させた島として捉え、いつでも永遠の流れの方へ、つまり死の方へ漕ぎ出せるよう、この島かげの入江に一艘のカヌーを用意しているのだが、しばらくはここに逗留し、いつこの島を離れ、自身の靈魂が次に星や土蜘蛛に宿るのかは、すべて大いなるものにまかせようという内容である。

氏自ら、インドの詩人タゴールに影響を受けたと語っていられたのを私は耳にしたこともある。さらに驚嘆すべきは全詩集刊行後の二〇〇七年春には「記憶する水」を上梓、その年の花椿賞を受賞している。その、みずみずしい感性は枯れることがないようである。

ガマの油から糖尿病の新薬なるか？



杉本 忠 夫

(虎の門病院
内分泌代謝科嘱託医)

今年の初め、イギリス北部のアルスター地方で開催された年次医学々術集会において、糖尿病の研究者達には興味をそそる一つの新発見が報告されました。それはカエルの皮膚(「ガマの油」)に関係していました。

日本のガマの油ではありませんが、昔からヨーロッパではカエルの皮膚について不思議な事象が多く、それらについていろいろな研究がされてきました。

今回の報告は、今まで知られていな

かった緑カエルの皮膚から「プソイデイン1,2」とよばれる新しいペプタイドが発見され、糖尿病の新しい治療薬になる可能性が発表されました。そこで、今回はこのヨーロッパ版の「ガマの油」と糖尿病を、酒林の酒肴にしてみたいと思います。

近年、日本、欧米先進国をはじめとして発展途上国においては、糖尿病の罹病率が非常に高くなってきていることがマスコミで報道されています。その主因は運動量の減少によるといわれ

ています。

そこで、糖尿病の予防対策が急務となつてきております。日本では今年度から、メタボリックシンドローム(メタボ) 退治が厚生労働省の政策目標に設定されました。メタボ退治のための大規模なメタボ検診、そして検診後は放置せず、さらにその後フォローアップ検診を行い、メタボ退治の実効性を高めようとしております。

糖尿病の治療は食事療法と運動療法がその基本となっております。しかし、しっかりと食事・運動療法を行っても血糖のコントロールが不十分な場合には、糖尿病の重大な合併症を招くこととなります。

たとえば、糖尿病性網膜症にともなう眼底出血により視力障害をきたしたり、糖尿病性腎症が慢性腎不全(尿毒症)まで進行しますと人工透析療法が必要になってきます。

そこで糖尿病の食事・運動療法を行っても血糖のコントロールが十分できない場合には、経口血糖降下剤の内服療

法を開始します。

しかし、それでもなお血糖のコントロールが不十分な場合には、インスリンを注射する自己インスリン皮下注射療法などの薬物療法を行い、十分な血糖のコントロールを図ることが必要となってきました。

最近、糖尿病の薬物療法は新しい薬もかなり開発され発売されてはきてはいますが、まだ十分なものではありません。そこで、糖尿病の治療にはさらに強力な効能があり、なおかつ副作用の少ない、安全な糖尿病の新薬が望まれております。

ところで、イギリスの学会で発表された緑ガエルはアマゾン河流域やトリニダード地方の池、湖やラグーンに棲息しています。

この緑ガエルは他のカエルとくらべ非常に変わったところがあります。このカエルはオタマジャクシの時は体長が二十七cmもありますが、親ガエルになると体長は四cmと、オタマジャクシの六分の一と逆に小さくなってしまい

ます。そのため逆さガエルまたはアベコバガエルとも呼ばれています。

アイルランドのアルスター大学の研究グループはこの変わった緑ガエルに目を付け研究を続けていました。そして、研究者達がこの逆さガエルの皮膚について研究を進めていたところ、ついにこの逆さガエルの皮膚からある種の新しいペプタイド（蛋白質の一種）を発見しました。それがプソイデインです。

この逆さガエルのプソイデインは発見当初は病原菌を退治する抗生物質の作用が認められました。そのため研究初期には有望な抗生物質として研究開発が進められていたようです。

その研究を進めていくうちにプソイデインの仲間のペプタイドでプソイデインー2と呼ばれる新種のペプタイドが発見されたのです。

幸運なことに、このプソイデインー2がインスリンを産生する膵ベータ細胞からインスリンの分泌を強力に促進することが新たに発見されました。

ついで、この研究グループはこのプソイデインー2をインスリンを産生する膵ベータ細胞の培養液に添加して培養実験を行いました。その結果、プソイデインー2を添加した場合は、膵ベータ細胞からインスリン分泌が最低でも約五〇%、また最高では何と約二二〇%も増加することがあきらかになりました。

以前、日本においては百日咳菌から抽出されたあるタンパクが膵ベータ細胞からインスリン分泌を促すことが発見されました。

この物質は強力な血糖コントロールの改善作用があり、糖尿病専門医の間では糖尿病の治療がほぼ完成するのではないかと、大きな話題になりました。

ところが、残念なことに重大な副作用が指摘され、糖尿病の薬としての開発は頓挫してしまいました。

新しく発見されたガマの油のプソイデインー2の研究がさらに進展し、糖尿病の有望な治療薬になることを楽しみにしております。